P-26

ドマリ語エルサレム方言の完了動詞に見られる変則的な一致標示

東京大学　人文社会系研究科　博士課程一年　北村萌

要旨

本研究は、ドマリ語エルサレム方言の動詞の一致標示体系を提示し、完了動詞に見られる変則的な一致標示がどのような背景によって成立したのかという問いに答えることを目的とする。筆者がエルサレムにおいて 2019–2020 年に行った調査や、アンマンにおいて 2019 年に行った調査に基づき、ドマリ語エルサレム方言の一致標示体系を記述した後、そこに見られる変則的な一致標示の背景について、言語接触と音韻面から説明を試みる。

結論として、以下のことを主張する。完了相の他動詞において動作主が 3 人称単数、被動者が 3 人称単数あるいは 3 人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示は、アラビア語との言語接触を通じた部分的な pattern replication であり、重音脱落が生じやすい環境であったという音韻的な側面に起因して生じたものである。

1. 導入

本研究は、ドマリ語エルサレム方言の動詞の一致標示体系を記述し、完了動詞に見られる変則的な一致標示がどのような背景によって成立したのかという問いを立てる。この問いに答えるため、ドマリ語エルサレム方言の一致標示体系を記述した後、そこに見られる変則的な一致標示が言語接触を通じた pattern replication である可能性を指摘し、音韻面からも考察を行う。ドマリ語の完了動詞における変則的な一致標示は、ドマリ語エルサレム方言を体系的に記述した先行研究 Macalister (1914) や Matras (2012) においては記述されていない。本稿の例文には、エルサレム生まれエルサレム育ち 67 歳の男性 Kareem Sleem 氏から 2019 年 1 月–2020 年 5 月にアラビア語を介して得た調査結果と、エルサレム生まれで、1967 年の第三次中東戦争以降アンマンに移住した話者から 2019 年 12 月にアラビア語を介して得た調査結果を用いる。

2. ドマリ語についての背景

ドマリ語はインド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派インド・アーリア語群に属する言語で、話者は中東を中心に散住しているドム人であり、そのほとんどがアラビア語とのバイリンガルである。シリア、レバノンなどの北部方言と、パレスチナ、ヨルダンなどの南部方言に分けられる。本稿では、南部方言のうち、エルサレム方言を対象とする。ドマリ語は厳しい消滅危機状態にあり (EGIDS 6b-9)、エルサレム方言はその中でも特に危機的な状況にある。

3. ドマリ語エルサレム方言の一致標示

ドマリ語は、完了相と未完了相で用いる一致標識のセットが異なっている。さらに、完了相の動詞は、成立の歴史的背景や用いられる条件によって 3 つのセットに分けられる。表 1 はドマリ語エルサレム方言の一致標識である。これらの一致標識の詳しい起源については、北村 (2022) を参照されたい。

このように、ドマリ語では条件によって 4 つのセットの一致標示の使い分けが存在するものの、主語 (自動詞の唯一項と他動詞の動作主) との動詞の一致はほとんどの場合義務的である。また、他動詞節に

明示的な被動者名詞句が存在しない場合、他動詞は動作主の一致標識の後で、人称代名詞接辞によって義務的に被動者を標示する。この人称代名詞接辞は表 2 のようである。

表1: ドマリ語エルサレム方言 一致標識

	未完了	完了		
	agr. 型	adj. 型	pron. 型	adj. + agr. 型
1SG	-am		-om/oːm	
2SG	-eːk		-or/oːr	
3SG	-ar	-a (M)/-i (F)	-os/oːs	
1PL	-an			-eːn
2PL	-as			-eːs
3PL	-ad/-and	-e		-ed

表2: 人称代名詞接辞

	形式
1SG	-(o/i/e)m
2SG	-(o/i/e)r
3SG	-(o/i/e)s
1PL	-man
2PL	-ran
3PL	-san

未完了相の動詞においては、常に agreement marker 型 (agr. 型) の一致標識のセットが用いられる。この一致標識のセットは、3SG -ar と 3PL -ad/and に、サンスクリットなどの Old Indo-Aryan の直説法現在能動動詞の一致標識 (3SG -ati, 3PL -anti) に起源を持つ可能性が高い形式を持つ。

(1) a. ama kamk-**am**-i.
I work-**1SG**-PRS
'I work.'

b. qol-**ar**-i kaːby-a.
open-**3SG**-PRS door-OBL
'(S)he opens the door.'

c. lah-**am**-r-i kull diːs.
see-**1SG.A**-2SG.P-PRS every day
'I see you every day.'

完了相の動詞においては、1SG、2SG 主語との一致は常に pronominal suffix 型 (pron. 型) の一致標識によって、1PL、2PL 主語との一致は常に adjective + agreement marker 型 (adj. + agr. 型) の一致標識によって標示される。3SG、3PL 主語との一致は、自動詞あるいは明示的な被動者名詞句が存在しない他動詞においては adjective 型 (adj. 型)、明示的な被動者名詞句が存在する他動詞においては 3SG 動作主は pronominal suffix 型、3PL 動作主は adjective + agreement marker 型によって標示される (表 3)。

完了相の一致標識のうち pronominal suffix 型は、人称代名詞接辞に由来することが推察される形式を持つ。

cf. kar-d-**om** 'I did' daːj-**om** 'my mother'

表3: 完了動詞の一致標識の分布

	自動詞	他動詞 (被動者 NP 有り)	他動詞 (被動者 NP 無し)
1SG		pron. 型	
2SG		pron. 型	
3SG	adj. 型		pron. 型
1PL		adj. + agr. 型	
2PL		adj. + agr. 型	
3PL	adj. 型		adj. + agr. 型

kar-d-**or** 'You did'　daːj-**or** 'your mother'

fer-d-**oːs**-im 'He hit me'　daːj-**os** 'his mother'

閉音節においては短母音が (2a)、開音節においては長母音が (2b, c, d) 見られる。

(2) a. nan-d-**om**　samak-i　aʤoti.
bring-PRF-**1SG.A** fish-OBL today
'I brought fish today.'

b. lah-d-**oːm**-ir　xoʤoti.
see-PRF-**1SG.A**-2SG.P yesterday
'I saw you yesterday.'

c. nan-d-**oːr**-is.
bring-PRF-**2SG.A**-3SG.P
'You brought it.'

d. ʤan-d-**oːs**-im?
know-PRF-**3SG.A**-1SG.P
'Did (s)he know me?'

adjective + agreement marker 型は、名詞/形容詞に接続して複数を表す接辞 -e に 1PL、2PL、3PL の未完了 agreement marker 型の一致標識をそれぞれ接続させて成立したと考えられる形式を持つ。

cf.　1PL -e + -an → -eːn　　2PL -e + -as → -eːs　　3PL -e + -and → *-eːnd[1] > -ed

(3) a. itme　qeː-r-**eːs**.
You.PL eat-PRF-**2PL**
'You ate.'

b. ʕallim-r-**eːn**　doːm.
learn-PRF-**1PL** Domari

[1] ドマリ語北部方言では -eːnd の形式が見られる (Herin 2012, 2014)

‘We learned Domari.’

c. feː-r-**eːn**-san.
hit-PRF-**1PL.A**-3PL.P
‘We hit them.’

d. lah-d-**ed**-im.
see-PRF-**3PL.A**-1SG.P
‘They saw me.’

adjective 型の一致標識は、名詞/形容詞と同じ、性と数による一致体系を持つ。

cf. eːr-**a** ‘He came’ kaʤ-**a** ‘non-Dom man’
eːr-**i** ‘She came’ kaʤʤ-**i** ‘non-Dom woman’
eːr-**e** ‘They came’ kaʤ-**e** ‘non-Dom men/women’

(4) a. kar-d-**a** mansaf.
make-PRF-**3SG.M** mansaf
‘He made mansaf (traditional Arab dish).’

b. tir-d-**i** saːl ama-ke.
put-PRF-**3SG.F** rice I-BEN
‘She served me rice.’

c. kamk-id-**e** baladiːyeː-ma.
work-PRF-**3PL** city hall-LOC
‘They worked in the city hall.’

以上のように、ドマリ語エルサレム方言では、アスペクトや条件によって用いられる一致標識のセットが異なるものの、ほとんどの場合において動詞は主語と義務的に一致する。

しかし、完了の他動詞の動作主が 3SG で、被動者が 3SG あるいは 3PL であり、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に限って、被動者が 3SG の場合には、動作主と被動者のどちらが一致を引き起こしているのか判断できない曖昧性のある一致標示が、被動者が 3PL の場合には、被動者のみが標示され、動作主は標示されないという一致標示が見られる。以下の例文は、(5) a. が動作主と被動者が 3SG である例文、b. が動作主が 3SG で被動者が 3PL である例文である。

(5) a. kaːni bag-id-os? *bag-id-oːs-is
who break-PRF-3SG.A/P
‘Who broke it?’

b. lah-d-oːsan. *lah-d-oːs-san.
see-PRF-3PL.P
‘He saw them.’

このような変則的な一致標示は、先行研究においては確認できない。Macalister (1914) によるドマリ語エルサレム方言の記述を見ると、動作主が 3SG、被動者が 3SG あるいは 3PL であり、明示的な被動者名詞句が存在しない完了の他動詞節について、以下のような例が確認できた。

(6) a. nan-d-**o:s-san**.
see-PRF-**3SG.A-3PL.P**
'He brought them.' (Macalister 1914: 29)

b. man-d-**os-s**-i-ʔ.
see-PRF-**3SG.A-3SG.P**-NEG
'She did not leave him.' (Macalister 1914: 29)

また、Matras (2012) による同方言の記述を見ると、動作主と被動者がともに 3SG であり、明示的な被動者名詞句が存在しない完了の他動詞節について、以下のような例が確認できた。

(7) a. lah-d-**o:s-is**.
see-PRF-**3SG.A-3SG.P**
'S/he saw he/him.' (Matras 2012: 82)

これらの例より、本研究で記述したような変則的な一致標示は、先行研究における話者では見られないため、ドマリ語エルサレム方言内でも一部のコミュニティのみにおいて生じた改新であると推定できる。

4. 変則的な構文が生じた背景

(5) に見られるような変則的な一致標示について、被動者が 3SG の場合と 3PL の場合をともに、動作主がゼロ標示であり、被動者のみの標示が残っていると仮定すると、ドマリ語が接触しているアラビア語の構文をモデルにした部分的な pattern replication が生じた結果であると推定することができる。

pattern replication とは、上層言語の構造をモデルにして、基層言語の本来の構造を再解釈することであり (Matras 2020)、語レベルの場合はカルクや翻訳借用、句や節レベルの場合は metatypy, structural borrowing, grammatical borrowing, syntactic restructuring などとも呼ばれる。

以下の例文は、例文 (5) a. b. を、動作主がゼロ標示であり、被動者のみの標示が残っていると仮定したものである。

(8) a. kaːni bag-id-**ø-os**?
who break-PRF-**3SG.A-3SG.P**
'Who broke it?'

b. lah-d-**ø-o:san**.
see-PRF-**3SG.A-3PL.P**
'He saw them.'

明示的な被動者名詞句が存在しない他動詞節においては、人称代名詞接辞を用いた被動者標示が義務的であるため、(8) の例において被動者が標示されていることは規則通りである。一方、動作主については、上記のような限定的な場合を除いて、ドマリ語の動詞は義務的に動作主と一致するため、(8) のように動作主がゼロ標示になることは変則的である。

ドマリ語が接触しているアラビア語においては、完了動詞の動作主が 3SG の場合、ゼロ標示になる。次の例文は、アラビア語の完了動詞の動作主が 3SG の場合の例である。

(9) dˤarab-**ø**-ni.
hit.PRF-**3SG.A**-1SG.P
'He hit me.' (Elihay 2012: 113)

このように、完了動詞において 3SG 主語がゼロ標示になるという点において (8) と (9) は構造が類似しており、ドマリ語の (8) のような構文は、アラビア語の (9) のような構文をモデルとした pattern replication である可能性が高い。

ただし、アラビア語においては、完了動詞の 3SG の動作主は常にゼロ標示である一方で、ドマリ語の場合、3SG/PL の被動者 -s/-san が接続する場合のみ、3SG の動作主がゼロ標示になる。このような条件下でのみアラビア語の構文の pattern replication が生じた理由としては、以下のような音韻的側面からの説明が可能である。

ドマリ語においては、3 人称単数の動作主標示 -(o)s に、3 人称単数 -(i)s あるいは 3 人称複数 -san の被動者標示が接続する場合、子音 -s- が連続する。ここに、重音脱落による一致標示の摩耗が生じ、曖昧性のある一致や動作主が標示されない一致が生じた一因になったと推定できる。

e.g. -os-is > -os-s > -os, -os-san > -osan

また、例文 (5) b. や (8) a. b. に見られる一致標示は、動詞が動作主ではなく被動者と一致するという点においては能格的な構文であるという分析も可能である。Du Bois (1987) は、対格言語であっても能格言語であっても、話題継続性を持ちやすい S と A を同一に扱おうとする対格構文への動機と、新情報を担いやすい S と P を同一に扱おうとする能格構文への動機の競合が存在していることを示した。格標示は一貫して対格型であり、一致標示もほとんどの場合において対格型であるドマリ語において、限られた条件下で能格的な構文が見られることは、Du Bois (1987) のこの分析と一致する。

5. 結論

本研究では、ドマリ語エルサレム方言の動詞の一致標示体系を記述し、起源が異なる一致標識のセットの分布を提示した。また、完了相の他動詞において動作主が 3 人称単数、被動者が 3 人称単数あるいは 3 人称複数で、明示的な被動者名詞句が存在しない場合に生じる変則的な一致標示がどのように生じたのかという問題に対し、アラビア語の部分的な pattern replication が生じた可能性を指摘し、重音脱落が生じやすい環境であったという音韻的な側面にも起因して生じたものであるという分析を行った。

参考文献

Du Bois, John W. (1987) The discourse basis of ergativity. *Language 63 (4)*: 805–855.

Elihay, Yohanan (2012) *The Olive Tree Dictionary: A Transliterated Dictionary of Conversational Eastern Arabic (Palestinian)*

Herin, Bruno (2012) The Domari language of Aleppo (Syria). *Linguistic Discovery 10 (2)*: 1–52.

Herin, Bruno (2014) The northern dialects of Domari. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 164*: 407-450.

Macalister, Robert Alexander Stewart (1914) *The language of the Nawar or Zutt: The nomad smiths of Palestine.* Gypsy Lore Society Monographs 3. London: Edinburgh University Press.

Matras, Yaron (2012) *A grammar of Domari.* Berlin: De Gruyter Mouton.

Matras, Yaron (2020) *Language contact. (2nd ed.)* Cambridge: Cambridge University press.

北村萌 (2022) 「ドマリ語の系統関係を一致標識から考える」『東京大学言語学論集』44: 127–153.